

## 「後期ヴァイキング時代」研究史におけるクヌートの位置と展望

小澤実

### 1. はじめに

初期中世史を語る上で忘れてはならない歴史事象の一つに、「ヴァイキング」の存在がある<sup>2</sup>。8世紀末から11世紀初頭に至る三世紀にわたってヨーロッパ中を略奪し荒廃へと導いた北欧出身の戦士というのが、彼らに対する暗黙の定義であろうか。もちろん、この見方もヴァイキングの一面を言い当ててはいるが、あくまで一面である。これは被害を受けた西欧側の文献史料に依存していたためであり、文献のみから構築される狭い意味での歴史学が生み出した必然的結果であった。しかしながらヴァイキングを「中世暗黒」説の根本に据える西欧の歴史家に対し反駁を試みたのが、J.Steenstrup, H.Arbmann, J.Brøndstedら北欧出身の考古学者である<sup>3</sup>。彼らが提示した物的証拠は旧来のヴァイキング像を一新するに足る質及び量を備えていた。ヘゼビューやリーベに代表される都市的遺構、有力者の墓地から発掘された豪華なヴァイキング船、新大陸における居住跡などである<sup>4</sup>。粗野な略奪者というのみならず、交易者、航海者、植民者としての姿も浮かび上がってきた。

考古学だけではない。古銭学、中世文学、美術史学等も独自の方法論を持ってヴァイキング史研究に乗り出し、文献史料からは想像だにできなかったかれらの日常生活に光を投げかけた<sup>5</sup>。文献史料の限定された研究領域一般に言えることであるが、ヴァイキング史研究もあらゆる分野のアプローチを統合する総合学としての「ヴァイキング学」となりつつある。本ノートでは今世紀における「ヴァイキング学」の形成を辿りながら、クヌートという一個人に対する研究史を振り返り、その意義と展望を論じる。何故クヌートかと問われるならば、次章で見るとおり彼こそが幕を閉じつつあったヴァイキング時代にあって最も成功を取めたヴァイキングであり、彼らを再考するにあたって適切な人物と考えられるからである。

### 2. クヌートについて

研究史の整理にはいる前にクヌートについての簡単な素描を行う。彼はのちイングランドを征服することになるスヴェン<sup>スウェン</sup>双叉髯王の子として10世紀の最末期デンマークに生を享け、幼き頃より父に従い戦闘の中で少年期を送る。1016年にはイングランド王エセルレッド二世の後を襲ってイングランド王に推挙され、兄ハラルドの急逝をうけてデンマーク王位をも兼ねた。エセルレッド二世の未亡人でありノルマンディー公リシャール二世の姉妹であったエンマと婚儀を結び、その後スコットランド、ノルウェー、スウェーデン各地を精力的に転戦し、1028年にはノルウェー王位も身に纏う。また神聖ローマ皇帝コンラート二世の戴冠式に出席するためにローマまで赴くこともあったが、1035年この世を去った。一時的にはあるが北海、バルト海を中心とする広大な領域に覇を唱え、後世「クヌート帝国」と称される<sup>6</sup>。

しかしながら彼個人に焦点を絞った論考は少なく、その原因は以下のように考えられる。一つには史料が断片的にしか残っていないこと<sup>7</sup>。彼が直接語った文書は1019(1020)年及び1027年イングランド臣民に向けた二葉の書簡しかなく<sup>8</sup>、アングロサクソン期の

基本史料である『アングロサクソン年代記』におけるクヌートに関する記述というのは極端に少ない<sup>9</sup>。年代記の筆者にすればクヌートは征服者であり、後世に向けて記録を残したくなかったからであろうと言われる<sup>10</sup>。彼を挟んだ前後の時期については詳細に述べられているのである。北欧側の史料といえば後世になって書かれた「サガ」と総称される作品ばかりで、その時間的懸隔があまりにも大きく利用には慎重を要す<sup>11</sup>。それゆえ比較的保存状態のよい「法」や妻に捧げられた「称揚文」から推測せざるを得ない。クヌート法と呼ばれる前者は聖職者に対する内容を持った26条からなる前半部分と、世俗統治に関わる内容を持つ84条からなる後半部分とに分かれる<sup>12</sup>。アングロサクソン期に書かれた法の中では最もよくまとまっており、分量も多い。後者は『王妃エンマに捧げる賛辞』と称される作者未詳のラテン語散文である<sup>13</sup>。クヌート王妃であったエンマをたたえるために書かれた作品であるが、そのためには彼女に連なるものを称えるべしと序文で宣言し、以下クヌートと二人の息子であるハルサクヌートの事蹟を比較的詳細に語っている。そのほかには100枚弱の特権状(charters)と王令(writs)が確認される<sup>14</sup>。

もう一つは「クヌート帝国」が短命であったこと。クヌートの死後息子のハルサクヌートが後継者として立つが、北海・バルト海周辺の諸地域から反乱の手が上がり、「クヌート帝国」はあっけなく崩壊した。四分の一世紀も続いていない。それゆえ研究者の目は、史料が多く残っていることも相俟って、長期にわたって存続しイングランド社会に深い根を残した「ノルマン・コンクエスト」に向けられ、「クヌート帝国」はアングロサクソン期からアングロノルマン期へと移行する時期の一エピソードとして描かれることになる。

このような研究史上の問題点はあるが、以下管見の限りで研究者の構築したクヌート像を追ってみたい。

### 3. Larson の研究

個人の事績に限定した初めての研究書は、L.M.Larsonによる『クヌート大王とヴァイキング時代におけるデーン人帝国主義の勃興(1912)』である。アングロサクソン時代の専門家であったLarsonはイングランドやノルマンディーに残存する同時代史料のみならず12世紀以降に記述されたサガ史料も利用しながら、クヌート個人の伝記の体裁をとって平明な文体で彼の一生を書き上げた。社会経済的な時代背景にはあまりふれず、クヌートによる北海周辺地域の征服活動、北欧三国内におけるヘゲモニーの推移を中心に叙述している<sup>15</sup>。北欧の考古学者たちがようやく西洋の学者の手になるヴァイキング像に修正を加えようとしていた時期であり、史料の入手は困難で研究文献も僅少であったにもかかわらず、今なお最も詳細で具体的なクヌート像を提示する。彼はこの著書を公刊する以前の1910年、クヌートの政治政策を分析した論文も発表している<sup>16</sup>。

### 4. ヴァイキング史研究と経済史の隆盛

Larsonの著書から次の研究書が現れるまで実に80年もの歳月が流れるが、この間における後期ヴァイキング時代とアングロサクソン時代の研究に関して、いくつかの特徴を指摘しておきたい。

第一に非文献史料の利用が本格的に始まったこと。これはイングランド中世史家F.M.Stentonの功績が大きい。彼は『アングロサクソン時代のイングランド(1943)』の中

で、当時の社会経済的諸側面を明らかにするために古銭学及び地名学の成果を積極的に採用した<sup>17</sup>。Larsonの時代に比べれば格段に多くの発掘記録やカタログが公刊されており、非文献史料へのアクセスは容易になったとはいえ、研究方法の異なる諸分野を融合する事は決してたやすいことではない。Stentonはあくまでイングランド一國史の枠組みからはずれることなく、クヌートもイングランド王の一人として叙述の中に組み込んでいる。

第二に初期中世経済史におけるヴァイキングの役割が重要視されてきたこと。大論争を引き起こしたH.Pirenne『ムハンマドとシャルルマーニュ(1937)』に負うところが大きい<sup>18</sup>。ヴァイキング研究にあつて比較的早く反応を示したのは、『スカンディナヴィア経済史雑誌』に訳出されたS.Bolinの『ムハンマド、シャルルマーニュそしてリューリク(1953)』である。彼によれば、イスラームの拡大は西欧の経済を縮小させるどころではなく、そこへ多量の銀を貨幣の形で流入せしめたのである。その際イスラーム世界から西欧へ直接銀が移動したわけではなく、その仲介者としての役割を担ったのがヴァイキングであった、と論じている。さらにイスラーム銀が枯渇する時期とヴァイキングの西方進出時期が重なっていることに注目し、ヴァイキングによる西欧襲撃はもはや東方から得られなくなった銀を西方から得ようとしたためと結論する<sup>19</sup>。彼は古銭に含まれる銀の含有量及びイスラーム側の記述史料から以上の結論を導き出したが、この大胆なテーゼは今日に至るまでヴァイキング経済論の出発点として引用され続けている。

直接ヴァイキングを扱っているわけではないが、初期中世経済史を語る上で忘れてはならないのがM.Lombardである。その遺著である『最盛期におけるイスラーム 8-11世紀(1971)』では、西欧、ビザンツ、イスラーム三世界を軸に、更には金産出地域として欠かすことのできないアフリカをも視野に入れて、モノの流れそして貨幣の流れをダイナミックに描いている<sup>20</sup>。脚注が少なくその典拠が何であるのかははっきりしないが、同時に刊行された論文集所収の個別論文で情報を補うことができる<sup>21</sup>。初期中世史上におけるヴァイキングの経済的役割もLombardの提示する広域経済圏の一部をなすわけであり、このような巨視的視点を常に念頭に置きながら論じなければならぬだろう。

様々な分野からの新発見をうけて文献史料の読み直しをはかり、これまでのヴァイキング研究を総括し新たな研究方向を提起したのはBolinとも親交のあるイギリスの中世史家P.Sawyerであった。彼は『ヴァイキングの時代(1962)』において、文献史料にみられる様々な誇張、記述者の偏見を極力避けるために、他分野の研究成果と比較しながら慎重な判断を下すべきと主張する<sup>22</sup>。ヴァイキング自体は年代の確定が困難なルーン碑文以外の文字史料というものをほとんど残しておらず、比較対象としては非文献史料たる考古学史料、古銭史料、美術・技術史料等に依らざるを得ない。ともすれば歴史学は非文献史料を用いた研究を「補助学問」として一括りにするが、それぞれに長きにわたる研究史を持った学問であり固有の方法論を伴う。それゆえ各方法論の固有性を十分に消化した上で、何がいえるか、何がいえないか、どの史料を組み合わせればどのような成果が引き出せるかを判定しなければならない。Sawyerにいたって総合学問としての「ヴァイキング学」が成立したと見ることができよう。

Sawyerは次のように結論づける。初期中世は戦争や私闘であふれかえっていた時代であり、ヴァイキングでなくとも名誉や宝貨を求めて他者の領域に踏み込み戦いに身を投じることは珍しいことではない<sup>23</sup>。ではなぜヴァイキングがこれほどまでに記述史料の中

で畏怖と非難の対象となり、後世に悪評を残すこととなったのか。それは彼らがキリスト教徒ではなかったがゆえに神の懲罰をおそれることなく教会や修道院にも押し入ったためである。初期中世にあつて経済的にもっとも満ち足りていたのは、広大な荘園と莫大な喜捨物によって富を蓄積することのできた修道院及び教会である<sup>24</sup>。ヴァイキングはこうした宗教施設を襲撃することで効率よく宝貨を獲得しようと試みたのである。

### 5. 理論考古学と編年考古学による寄与

ヴァイキング時代の考古学そのものは19世紀より相当の蓄積がありSawyerもその成果を十二分に利用したわけであるが、その後K.Polanyiに代表される経済人類学の影響を受けながら一つの学問領域を開拓したのが理論考古学である<sup>25</sup>。K.Ransborgは『デンマークにおけるヴァイキング時代 ある国家の形成(1980)』の中で、都市的遺構や墓地群のごとき大がかりなものから動物の骨や日用品に至るまで、これまでに得られた考古学資料を時代別、地域別にプロットし、従来史料上の制約から等閑視されていたデンマーク内の状況を、グラフや統計表を多量に示しながら目に見える形で再構成した<sup>26</sup>。ヴァイキングが各地域に拡大したのはイスラーム銀の流入が枯渇したためという点ではBolin以来の説を引き継いでいるが、10世紀後半より気候の温暖化が始まりデンマーク国内でも次第に農業生産物の収穫量が増大したことがヴァイキングたちの拡大を支えていたという主張は注目に値する。この研究を受けてR.Hodgesは『暗黒時代の経済 都市と交易の起源 600-1000(1982)』を上梓した<sup>27</sup>。Ransborgがデンマークに限定して論じた経済的充実による権力体の形成過程を、北ヨーロッパ地域に敷衍して描く極めて示唆的な書である。両書とも理論が先行している感をぬぐい去ることはできないが、文献史料の残らぬ領域に一つの形を与えた貴重な成果である。

古典的な編年考古学の分野に目を向けてみよう。P.FooteとD.Wilsonの共著になる『ヴァイキングの功績(1970)』は、従来の成果を考古学の立場から総括している<sup>28</sup>。詳細かつ正確なデータ提供により、今日に至るまでヴァイキング研究者の座右におくべき基本書としての地位は揺るがない。その後、デンマークの考古学者E.Roesdahlによる『ヴァイキング時代のデンマーク(1980)』が公刊された<sup>29</sup>。彼女は、ペンギンブックスに所収された概説にも見られるように、ヴァイキングを組織的な軍事集団として捉える<sup>30</sup>。それはヴァイキング時代末期における軍事要塞の機能を重視したからにはほかならない。この要塞群が建築された時期及び目的に関してはある程度の論争史が蓄積されているが、現在ではスヴェン双叉髭王の時代に比定されており、クヌート研究の立場からも興味深い証拠提示といえることができる<sup>31</sup>。

### 6. Lawsonの研究

以上述べてきたように、ヴァイキング史研究は着実に進展しており、Larson以来途絶えていたクヌート個人に対する研究も現れてくる。その中心となるのがM.K.Lawsonである。

彼は1984年の『イギリス歴史学雑誌』上に『エセルレッド二世及びクヌート統治下におけるデーンゲルト及びヘレゲルトの徴収』という論文を発表する。いかにしてイングランドが侵略者であるヴァイキングに要求される賦課金を支払ったか、そのシステムを解明せんとする試みであった<sup>32</sup>。この賦課金に関しては『アングロサクソン年代記』に具

体的数値が記載されているが、徴収額があまりに莫大であるためにその数値の真偽を巡っての論争も行われている<sup>33</sup>。ヴァイキングが初期中世の商品・貨幣流通に極めて重要な働きをなしていたことは第四節で述べたとおりであるが、イングランドという一地域の具体相として11世紀初頭の貨幣の動きに一提言をなしたLawsonの業績は正当に評価されねばならない。

さらに彼は1992年の同雑誌上に『大司教ウルフスタンとエセルレッド二世及びクヌートの法における教訓的要素』を発表する<sup>34</sup>。二人の王はそれぞれイングランドに比較的安定した時代を作り出したエドガー王の法に範をとりラテン語及び古英語で書かれた法を残しているが、それは王自らが主導権をとって制定したのではなく、ウルフスタンが起草した草稿に王が確認を与えたものであることがわかっている<sup>35</sup>。Lawsonはこの法の中に、起草者であるウルフスタンが外敵の侵入や内乱で荒れ狂うイングランドに平和がもたらされるようにとの願いを託している点を読みとっている。

Lawsonは上記論文及び博士論文を核として『クヌート 11世紀初頭におけるイングランドのデーン人(1993)』を公刊した。文献史料を主とする史料そのものの吟味に始まり、クヌートが何らかの関係を取り結ぶことになる諸地域の政治的分析、統治方式とそれに対する被統治者の反応の考察等、その論点は多岐にわたる<sup>36</sup>。結論が明確とは言い難い。しかしながら重要な点は、「クヌート帝国」という広大な支配領域を確立できたのは、一人彼の英雄的資質によるものではなく、当時にあつては比較的有効に働いていたと思われる法制度や行政システムの存在、それに携わる貴族や聖職者等の担い手たちの存在を示唆していることである。

## 7. クヌートに関する研究集会とその報告

1990年にマンチェスターで開催された研究集会ではクヌートが題議として取り上げられ、その報告集として『クヌートの統治 イングランド、デンマーク、ノルウェーの王(1995)』が公刊された<sup>37</sup>。歴史学のみならず古銭学、考古学、地名学等の各界の代表的研究者が寄稿しており、重要な論文も少なくない。まずはSawyerの『クヌートによるスカンディナヴィア帝国』とN.Lundの『クヌートによるデンマーク王国』<sup>38</sup>。クヌートをイングランド史のひとこまとして捉えてきた従来の流れに一石を投じようとするものである。クヌートはあくまでヴァイキングの王であり、その地盤は故国デンマーク、そしてヴァイキングたちが相争うスカンディナヴィアの中にこそあるのだと。両者とも、文字史料はもとよりルーン碑文や貨幣の銘刻に至るまで援用し、「クヌート帝国」内におけるスカンディナヴィアの重要性を強調する。文献史料的には最も証明困難な点の一つであり、考古史料をいかにうまく議論の中に取り入れるかが、論証の正否を決めよう。

N.Hooper『クヌート統治期における軍事的発展』では、イングランド征服にあたってクヌートが利用した軍隊の分析を行う。彼はその構成を、家政に参与し王やearlに常に付き従うhousecarlsと、給与を与えられて戦いに身を投じるlithmenに大別する。前者は個人的な忠誠で指導者と結ばれており、後者は指導者に率いられ金銭のみによって関係を維持する。後者がイングランドにおいては土地を与えられておらず、個々人ではなく集団そのものにまとめて給与が支払われ、自らの船舶を所有しているところから、この集団に対し常備軍(standing army)という表現を与える<sup>39</sup>。しかしながら常備軍とは国家に直属し国庫から給与を支払われる永続的な組織であり、従来は百年戦争時になって現れ

てきたと説明されてきたわけだが、Hooperが何故以上のような根拠でlithmenを常備軍呼ばわりするのか私には図りかねる。どちらかといえば前者houscarlesの方が従来の意味での常備軍に、後者はルネッサンス期イタリアや三十年戦争期ドイツにおける傭兵団に近いのではないだろうか。しかしながら用語法の是非はともかく、クヌート軍の特徴を簡明に整理している点では興味深い論文である。

D.Hill『クヌートにとっての都市政策?』はわずか5ページのノートである。イングランドとの関連においてはそれほど興味を引くことのなかったデンマークの都市、要塞に目を向け、そこからイングランドにおけるクヌートの都市政策を考えてみてはどうか、と提言する<sup>40</sup>。そもそも経済的機能が重要となる都市とは本質的に異なるトレボリやノンネバッケン等の要塞施設を都市政策の一環として捉えるのは立論上問題があるだろうが、デンマーク内における商品流通の安全性を保持するための施設と捉えれば意味のある視点となろう。ヴァイキング時代の都市に関しては考古学の寄与に依るところが多く、近年その総括ともいえる書も公刊されたが<sup>41</sup>、これらを統治政策との関連でどのように捉えるかということは今後の課題といえよう。

古銭学の分野においてはK.Jonsson『クヌートの造幣』がある。貨幣はいつの時代にあっても権力者にとって重要な収入源となるために、厳格に統制されている。クヌート時代も例外ではなく、法の中でも貨幣の偽造者に対しては厳罰が課されている。そして王より許可を受けた造幣人のみが貴金属を定められた比率に従って融溶し打刻することができる。クヌートが統治した三国では必ずしも統一した通貨が使用されたわけではない。イングランドではエセルレッド期の政策をそのまま引き継ぎ、デンマークにおいてはイングランドの貨幣を模倣しようとしたものの結局狭い地域内に限定され、ノルウェーでは铸造所さえ見あたらず貨幣を輸入して利用する状況にとどまった<sup>42</sup>。クヌートによる短い統治期間では全支配領域に同種の貨幣を流通させることができなかつた。しかしながら貨幣政策をクヌートのもとに集権しようとする志向性を否定することはできない。

最後にS.Keynesの『クヌートのearlたち』。Keynesはクヌート統治下におけるearlと呼ばれる貴族層の実態を明らかにするために、特許状などに記載されている彼らの署名を丹念にピックアップして一覧表を作成し、署名回数や署名順序から特許状発行時における有力者を割り出した<sup>43</sup>。アングロサクソン期の政治は決して王の独断によるものではなく、賢人会議(witena gemot)と呼ばれる聖俗の有力者から構成される集会において、彼らからの助言を請けて行われる<sup>44</sup>。そもそも国王自身がこの賢人会議において承認されることによって正当性を得るのである以上、当時の政治システムにおいて極めて重要な役割を果たす機関といえよう。この手法は彼の学位論文である『エセルレッド‘不覚王’の国王証書』でさらに詳細にわたって展開されており<sup>45</sup>、証書作成のプロセスやそこから判明する政治システムを明らかにしている<sup>46</sup>。エセルレッドの統治期はクヌートのイングランド襲撃期とも重なっており、その分析はクヌート研究にあっても重要な位置を占める。

## 8. 展望

以上、クヌートという個人を中心に一世紀近くにもわたる研究史を眺めてきたが、最後にクヌート研究を行う意義とその可能性についてまとめておきたい。

まずは環北海・バルト海という視点。クヌートはヴァイキング出身のイングランド王というにとどまらない。イングランド、デンマーク、ノルウェーの三王位を兼ね、更に

はスウェーデン、スコットランドにも覇権を及ぼし、ノルマンディー公の姉妹を妻に迎へ、神聖ローマ帝国の皇帝戴冠式にも出席する北海・バルト海世界の覇者である。一国史や限定された一地域史という視点からは理解することのできない超地域的な性格を持つ。かつてブローデルが提示した海を中心とする歴史が、その持続性においては比べるべくもないけれども、ここにもある。慎重かつ大胆な外交政策、超地域的な通貨政策や都市政策も見て取ることが可能であり、今後の研究進展に期待が持てよう。

次に時代の転換期という視点。クヌートが歴史の舞台に現れるのは10世紀末から11世紀初頭にかけてである。カロリング帝国がその絶頂期から転落しつつあった9世紀と、封建諸国家がそれなりの形を取り始める11,12世紀に挟まれるこの時期に、研究者が時代をリードする諸権力の崩壊と形成の延長を探求する中で、混迷する後期ヴァイキング時代をその前史として扱ってきた。そこには北欧を独自の権力体と見なし、来るべき封建時代の一角として他地域と平等の地位を与えようという意識は少ない。カロリング時代と封建時代という所与の時代概念に挟まれた混乱期としての10,11世紀は、各地を席卷したヴァイキングとりわけそのエッセンスともいえるクヌートを中心に見直すことによって再考することが可能ではないだろうか。

最後は諸個人に対する視点。クヌートは歴史上稀にみる覇業を成し遂げた人物であることは以上述べてきた。しかしそれは彼の能力のみによるものではない。平和であれとの願いを込めて法を起草したヨーク大司教ウルフスタン、前イングランド王の未亡人でありノルマンディー公の姉妹である妻エンマ、エセルレッド二世に仕え、彼の死後は裏切りのかどで首をはねられた策謀家エアドリック・ストレオーナ、傭兵軍の指揮官で気まぐれなソルケル等、個性豊かな人物が、クヌートを支えたのである。Keynesの研究を始め、P.Staffordによるエンマの伝記<sup>47</sup>、クヌート統治期の最後になって力を持ってきたゴドウィンに関する論文等<sup>48</sup>、少しずつながら大樹の陰であまり注目されることのなかった人物にも目が向けられつつある。さらにクヌートはイングランド及び北欧両地域を活動の舞台としているがゆえに、彼を取り巻く人物の出自も広域に渡っている。第一の視点と関連するが、ここにも「クヌート帝国」の超地域性が看取され、新しいクヌート像ひいてはヴァイキング像を描くよすがとなろう。

## 〈註 釈〉

- <sup>1</sup> アングロサクソン史家であるLoynはイングランドにおけるヴァイキングを考察するにあたって、雑多な諸集団が個別に略奪を働いた10世紀前半までと、ある程度の組織性を持ったそれ以降とを区別している。当ノートで扱う時期はLoynのいう後期段階(the later stages)にあたるため、彼の区分に従って後期ヴァイキング時代とする。H.R.Loyn, *The Vikings in Britain* (London 1977)
- <sup>2</sup> ヴァイキングの出身地は大きく分けて現在のデンマーク、ノルウェー、スウェーデン三国である。各地域は独自の自然的、歴史的枠組みを保持しており、本来であればそれぞれ個別に考察しなければならない。以下ではデンマーク出身者を中心に論じているが、必ずしもヴァイキング=デンマーク人という一対一の対応をしているわけではない。
- <sup>3</sup> J.Steenstrup, *Normannerne*, 4vols. (Copenhagen 1876-1882); H.Arbmann, *Schweden und das Karolingische Reich* (Uppsala 1937); J.Brøndsted, *Vikingerne* (Copenhagen 1960) とりわけBrøndstedの著書はペリカンシリーズに所収され、英語圏でも広く読まれている。デンマーク語原典からの邦訳は、日本語で読めるヴァイキング概説書の中で最も信頼に足るものである。荒川明久・牧野正憲訳

「ヴァイキング」(人文書院 1988)。

- 4 ヘゼビューはユトランド半島の付け根に、リーベは半島西岸に位置していた交易拠点。そのほか著名な都市的遺稿に、スウェーデンのビルカ、ノルウェーのカウパンなどがある。
- 5 最新の概説は P.Sawyer (ed.), *The Oxford Illustrated History of the Vikings* (Oxford 1997) 各分野の第一人者による寄稿。参考文献も充実している。
- 6 クヌートは神聖ローマ皇帝ではないから皇帝という称号を正式に帯びたことはない。それゆえ「クヌート帝国」との言い方は誤解を招くが、多くの歴史家がこの表現を用いる。
- 7 クヌートに関する史料についての総論は、M.K.Lawson, *Cnut: The Danes in England in the Early Eleventh Century* (London 1993) の第二章参照。
- 8 ラテン語テキストと英訳は A.J.Robertson, *The Laws of the Kings of England from Edmund to Henry I* (Cambridge 1925) pp.140-53.
- 9 「アングロサクソン年代記」のテキストはこれまでに五種類が発見されており、それぞれ A～E テキストと呼ばれている。テキストの保存状況が最もよく多くの記述を読みとることができるのは A と E のテキストで、史料として最もよく利用される。C.Plummer and J.Earle (eds.), *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, 2 vols. (Oxford 1892-9) 全テキストの英訳も利用できる。D.Whitelock with D.C.Douglas and S.I.Tucker (ed.), *The Anglo-Saxon Chronicle: A Revised Translation* (London 1961). 現在全写本を一堂に集め比較検討しようという試みも進行中であるが、終了してはいない。
- 10 「アングロサクソン年代記」そのものの研究に関しては Whitelock 編の前書序文及び P.Sawyer, *The Age of the Vikings*. 2nd edn. (London 1971) pp.12-25. 参照。
- 11 サガに関しては中世文学において膨大な蓄積がありとりあえずは、谷口幸男「エッダとサガ 北欧古典への案内」(新潮社 1976)を参照。歴史学との関わりで興味深いものに、ステブリン・カメンスキー著/菅原邦城訳「サガのこころ 中世北欧の世界へ」(平凡社 1990)。
- 12 テキストとドイツ語訳は、F.Liebermann (Hrsg.), *Die Gesetze der Angelsachsen*, 3Bde. (Halle 1898-1916)。極めて詳細。まず依拠すべき校訂版であるが、簡便さにおいては英訳も利用できる、Robertson 編のものがよい。
- 13 M.Cl.Gerts (ed.), *Scriptores Minores Historiae Danicae Medii Aevi*, 2 vols. (Copenhagen 1917-22) 所収の校訂版がよいとされるが、筆者が参照し得たテキストは英訳付きの A.Campbell (ed.), *Encomium Emmae Reginae* (London 1949)。
- 14 特権状のテキストは多くの書籍、論文に分散しているので、まずはカタログとして利用できる、P.Sawyer (ed.), *Anglo-Saxon Charters: An Annotated List and Bibliography* (London 1968)。王令は、F.E.Harmer (ed.), *Anglo-Saxon Writs*, 2nd edn. (Stamford 1989)
- 15 L.M.Larson, *Canute the Great and the Rise of Danish Imperialism during the Viking Age* (New York and London 1912)
- 16 Idem, The Political Policies of Cnut as King of England, in *American Historical Review* 15, 1910, pp.720-43.
- 17 F.M.Stenton, *Anglo-Saxon England* (Oxford 1943 3rd edn. 1971). 筆者が参照したのは第三版。
- 18 H.Pirenne, *Mahomet et Charlemagne* (Paris et Bruxelles 1937). 邦訳は、増田四郎監修/中村宏・佐々木克巳訳「ヨーロッパ世界の誕生 マホメットとシャルルマーニュ」(創文社 1960)。イスラーム勢力の地中海への進出が東西交易を断絶に追いやり、以後西欧は11世紀における商業の復活に至るまで限定された領域における不活発な自然経済に甘んじなければならなかった、というのが骨子である。論争史に関しては、H.ピレンヌ他/佐々木克巳編訳「古代から中世へ ピレンヌ学説とその検討」(創文社 1975)所収の、プライス・ライアン「ピレンヌ死後25年」31-56頁。原論文の部分訳であることに注意。比較的新しいものに、R.Hodges and D.Whitehouse, *Mohammed, Charlemagne and the Origins of Europe* (London 1983)。
- 19 S.Bolin, Mohammed, Charlemagne and Rurik, in *Scandinavian Economic History Review* 1, 1953, pp.5-39.



- 邦訳は前出『古代から中世へ』133-85頁。本論文は1939年にスウェーデン語で発表されていたが、西欧学会では知られていなかったようである。
- <sup>20</sup> M.Lombard, *L'Islam dans sa Première Grandeur, 8<sup>e</sup>-11<sup>e</sup> siècle* (Paris 1971). 日本語で読めるロンバールの著作は『古代から中世へ』所収の「マホメットとシャルルマーニュ 経済的問題」110-32頁。
- <sup>21</sup> 様々な雑誌に寄稿された論文は脚注、そして独特の地図も含めて、Idem, *Espace et Reséaux du Haut Moyen Âge* (Paris 1971)。
- <sup>22</sup> P.Sawyer, *The Age of the Vikings* (1971)
- <sup>23</sup> T.Reuter, Plunder and Tribute in the Carolingian Empire, in *Transactions of Royal Historical Society* 5th series 35, 1985, pp.75-94. が参考になろう。
- <sup>24</sup> G.Duby, *Guerriers et Paysans, 7<sup>e</sup>-12<sup>e</sup> siècle: Premier Essor de l'Économie Européenne* (Paris 1973)
- <sup>25</sup> 理論考古学とは、経済理論に基づいたモデルを措定し、そのモデルに則りながら物質的証言の欠けている時代を再構成する考古学。とりわけ1960年代以降のアメリカで脚光を浴びる。
- <sup>26</sup> K.Ransborg, *The Viking Age in Denmark: The Formation of a State* (New York 1980)
- <sup>27</sup> R.Hodges, *Dark Age Economics: The Origins of Towns and Trade, AD.600-1000* (London 1982 2nd edn. 1989)
- <sup>28</sup> P.Foote and D.Wilson, *The Viking Achievement: A Survey of the Society and Culture of Early Medieval Scandinavia* (New York 1970 2nd edn. 1980)
- <sup>29</sup> E.Roesdahl, trans. S.Margeson and K. Williams, *Viking Age Denmark* (London 1982). オリジナルは、*Danmarks Vikingetid* (Copenhagen 1980)
- <sup>30</sup> Idem, *The Vikings* (London 1992). オリジナルは、*Vikingernes Verden* (Copenhagen 1987)
- <sup>31</sup> 論争史に関しては、Idem, The Danish Geometrical Viking Fortresses and their Context, in *Anglo-Norman Studies* 9, 1986, pp.209-26. 彼女の論文執筆時において要塞施設は現デンマーク国内で発見されたアッゲースポリ、フィアカット、ノンネバッゲン、トレレポリイの四カ所のみであったが、近年スカンディナヴィア半島先端部スコネ地方においても同様の形態をとる施設が発見されたようである。N.Lund, Scandinavia, c.700-1066, in R.Mckitterick (ed.), *The New Cambridge Medieval History II* (Cambridge 1995) pp.202-27.
- <sup>32</sup> M.K.Lawson, The Collection of Danegeld and Heregeld in the Reigns of Aethelred II and Cnut, in *English Historical Review* 99, 1984, 721-38. ちなみにデーンゲルトとは不定期に、ヘレゲルトは定期的に徴収されるヴァイキングへの貢納金である。
- <sup>33</sup> 古くから行われている論争であったが、Lawsonの論文をめぐり「イギリス歴史学雑誌」上で再燃した。J.Gillingham, 'The Most Precious Jewel in the English Crown': Levels of Danegeld and Heregeld in the Early Eleventh Century, in *English Historical Review* 104, 1989, pp.373-84. と、M.K.Lawson, 'Those Stories Look True': Levels of Taxation in the Reigns of Aethelred II and Cnut, in *English Historical Review* 104, 1989, pp.385-406. さらにJ.Gillingham, Chronicles and Coins as Evidence for Levels of Tribute and Taxation in Late Tenth- and Eleventh-Century England, in *English Historical Review* 105, 1990, pp.939-50. と、M.K.Lawson, Danegeld and Heregeld Once More, in *English Historical Review* 105, 1990, pp.951-61. 古銭史料に依拠して問題の解決を図ろうとしている点は従来の論争史にないが、説得的な結論が出ているわけでもない。
- <sup>34</sup> M.K.Lawson, Archbishop Wulfstan and the Homiletic Element in the Laws of Aethelred II and Cnut, in *English Historical Review* 107, 1992, pp.565-86. ウルフスタンはヨーク大司教を務めるかたわら、エセルレッド二世、クヌートと二代にわたるイングランド王に助言者として仕えた人物である。ウルフスタンの生涯に関しては、D.Whitelock, Wulfstan and the Laws of Cnut, in *English Historical Review* 63, 1948, pp.433-52
- <sup>35</sup> D.Whitelock, Wulfstan's Authorship of Cnut's Laws, in *English Historical Review* 70, 1955, pp.72-85.
- <sup>36</sup> M.K.Lawson, *Cnut: The Danes in England in the Early Eleventh Century* (London 1993)

- <sup>37</sup> A.Rumble (ed.), *The Reign of Cnut. King of England, Denmark and Norway* (London 1994). 以下、*Reign of Cnut* と略記する。
- <sup>38</sup> P.Sawyer, Cnut's Scandinavian Empire, in *Reign of Cnut*, pp.10-26; N.Lund, Cnut's Danish Kingdom, in *Reign of Cnut*. pp.27-42.
- <sup>39</sup> N.Hooper, Military Developments in the Reign of Cnut. in *Reign of Cnut*. pp.89-100.
- <sup>40</sup> D.Hill, An Urban Policy for Cnut? in *Reign of Cnut*. pp.101-105.
- <sup>41</sup> H.Clarke and B.Ambrosiani, *Towns in the Viking Age* (London 1991 revised edn. 1995)
- <sup>42</sup> K.Jonsson, The Coinage of Cnut, in *Reign of Cnut*. pp.193-230.
- <sup>43</sup> S.Keynes, Cnut's Earls, in *Reign of Cnut*, pp.43-88.
- <sup>44</sup> 賢人会議に関する先駆的な研究でいまだにその価値を失っていないのは、F.Liebermann, *The National Assembly in the Anglo-Saxon Period* (Halle 1913)。
- <sup>45</sup> S.Keynes, *The Diplomas of King Aethelred 'the Unready' 978-1016: A Study in their Use as Historical Evidence* (Cambridge 1980)
- <sup>46</sup> エセルレッド '不覚王' ことエセルレッド二世はヴァイキングの襲来に対し機敏な対応ができなかったと年代記作家からも非難を浴びた王であるが、その統治期は38年にも及び、「アングロサクソン年代記」における記述や証書類も数多く残っているためアングロサクソン期の王の中では比較的史料アプローチのしやすい対象である。筆者未見であるが、D.Hill (ed.), *Ethelred the Unready: Papers from the Millenary Conference* (London 1978)
- <sup>47</sup> P.Stafford, *Queen Emma and Queen Edith: Queenship and Women's Power in Eleventh-Century England* (London 1997)
- <sup>48</sup> D.Raraty, Earl Godwine of Wessex: The Origins of his Power and his Political Loyalties, in *History* 74, 1989, pp.3-19.